

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：84604

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12560

研究課題名（和文）シルクロード天山北路の形成過程に関する考古学的研究

研究課題名（英文）Archaeological Research on the Formation Process of the Silk Road 'Tianshan North Road'

研究代表者

山藤 正敏（Yamafuji, Masatoshi）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員

研究者番号：20617469

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、地域文化史の復元によりシルクロード天山北路の形成背景を探る目的で、キルギス共和国北部のチュー渓谷西部において考古学踏査を実施し、計93件の遺跡を登録した。遺跡の時期別分布数により、チュー渓谷西部における居住活動は後期青銅器時代末（前1000～800年頃）に遡り、中世後期（9～14世紀）にピークを迎えたことが判明した。また、遊牧民の所産と考えられる囲い込み遺構は、中世前期には追悼遺構とともに平野部の都市周辺に多く見られたが、10世紀以降の中世後期には山麓部に遍在した蓋然性がある。この現象は、カラハン朝の遊牧民が冬季に都市に居住し、シルクロード交易へ積極的に関与した可能性を示唆している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、2点の学術的意義を有している。1つは、シルクロード天山北路の要衝に位置するチュー渓谷西部における通史的な遺跡分布を包括的に明らかにしたことである。もう1点として、中世以降のチュー渓谷西部における交易拠点とその周辺の小型遺跡から、定住社会と遊牧社会の相互関係史を具体的に初めて示したことは重要である。

上記に加えて、本研究の成果は遺跡保護の点で一定の社会的意義を有している。キルギスでは遺跡の保護施策が十分に実施されていない中で、本研究は分布する遺跡、特に新規確認の遺跡データを網羅的に収集しており、キルギスにおいてはシルクロードの文化史を守ることに微力ながらも貢献できたと考えている。

研究成果の概要（英文）：To reconstruct the regional cultural history as the formative background of the Tian Shan North Way, the Silk Road, the present study conducted an archaeological survey in the western Chuy Valley, northern Kyrgyz. Registering a total of 93 sites, the archaeological survey revealed that the occupations commenced at the end of the Late Bronze Age (ca. 1000-800 BC) and reached a peak during the Late Middle Age (ca. 9-14th centuries AD). In addition, enclosures attributable to the ancient pastoral nomads may show a clear concentration in the mountain foot during the Late Middle Age, while these are primarily confirmed around the cities and towns in the central valley during the Early Middle Age. This late distribution pattern implies that the Kara Khanid pastoral nomads settled in the cities and towns during the winter season to intensively participate in the international trade along the Silk Road.

研究分野：西アジア・中央アジア考古学

キーワード：シルクロード 天山北路 定住 遊牧関係 セミレチエ 考古学踏査 ソグド人 クルガン

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 敦煌以西、いわゆる西域のシルクロードは、天山山脈の北を通る天山北路、南を通る西域北道及び西域南道という3道に分かれていた。このうち南の2道は前1~2世紀より発展していたが、天山北路の形成は数世紀遅れるとされている(長澤編2002)。本研究が対象とするセミレチエは天山北路のほぼ西端に位置しており、天山北路のいわば西側の玄関口にあたる。街道沿いには、アク・ベシム遺跡やクラスナヤ・レーチカ遺跡といったソグド人により建設されたといわれる植民都市が所在している。このことから、西隣のソグディアナを拠点とし、シルクロード交易の主な担い手として活躍していたソグド人によって、同街道が西方から発展したことが窺い知れる。ただし、いずれの植民都市も6世紀を遡ることはなく、これ以前の時期の様相は不明瞭なままであった。とはいえ、山岳地帯に挟まれたステップ地帯であるため地形的に通行がたやすく、通商路に適していたはずのセミレチエ(チュー渓谷)が、ソグド人が進出する以前の時期には交通路として活用されていなかったというのは極めて不可思議である。こうした重大な疑問が存在するにもかかわらず、玄奘三蔵がインドへの往路に通過したことで知られる天山北路の形成過程に関わるセミレチエ(チュー渓谷)の通時的利用状況は、考古学的観点から十分に検証されてきたとは言い難い。

(2) 上記のとおり、シルクロード天山北路の西端の要衝を占めるにもかかわらず、セミレチエ(チュー渓谷)の文化史は部分的にしか解明されておらず、シルクロード天山北路の形成前後の状況を考察することができないままであった。

セミレチエ(チュー渓谷)の文化史的・考古学的研究は、常に都市遺跡に焦点を絞って進められてきた。その主目的は、都市の形成過程やその全体構造を把握すること(cf.

1950;

1959)や、ゾロアスター教・マニ教・仏教・キリ

スト教ネストリウス派といった西方伝来の宗教の伝播経路を解明することにあつた(cf. フォルツ2003)。したがって、天山北路沿いの主要な都市遺跡(クラスナヤ・レーチカ遺跡、アク・ベシム遺跡、プラナ遺跡等)において局所的な考古学調査が活発に行われてきた反面、その周辺地域は、一部の積石墓やキャンプ址を除いて、ほとんど顧みられることがなかった。このため、同地域では通時的かつ包括的な物質文化の分布状況の変遷を参照することができなかった。こうしたことから、天山北路の形成やその背景に想定される定住民・遊牧民の交渉関係を含む地域文化史を再構築することが極めて困難な状況にあつた。

2. 研究の目的

(1) チュー渓谷では包括的な考古学踏査による十分な遺跡確認が行われてこなかったために、その地域文化史の精緻な復元は不可能な状況であった。このため、チュー渓谷内において車両と徒歩による包括的かつ重点的な考古学踏査を実施し、遺跡分布データを蓄積することを目的とした。遺跡踏査に先立ち、衛星画像上において地物を確認し、これらを地上で確認するかたちで効率的な遺跡確認を目指す。こうして取得した調査データに基づき、遺跡データベースを構築する。構築した遺跡データベースをGIS上で運用し、チュー渓谷における遺跡分布の変遷、すなわち居住史(文化動態)を解明する。

(2) チュー渓谷周辺に広がるステップ地帯は歴史的に遊牧民の活動の場となっており、今日でも放牧活動が盛んである。したがって、シルクロード天山北路の形成過程を適切に論じるために、ソグド人入植前後の定住民と遊牧民の関係性について考古学的・歴史学的・民族学的に追求することも本研究の目的である。

3. 研究の方法

上記の研究目的に鑑みて、また、本科研費交付後の所見に基づいて、チュー渓谷西部の現代拠点都市カラ・バルタ(Kara-Balta)周辺の、東西約35 km、南北約50 km、約1,270 km²の範囲を調査対象とした(図1)。調査地域全体を見るとかなり広大な地域ではあるが、その大部分では農地開拓が進んでいたことから、重点的に踏査できた範囲は500 km²に満たず、設定した調査地域全体の39%未満にとどまった。

現地調査にあたっては調査対象地域を4つの区域(Zones I~IV)に分割し、調査効率を向上させることに努めた。Zone Iは、今日の東西基幹道路の北側の広い範囲を占めており、その大部分が海拔標高600~700 mの沖積平野から成る。Zones II~IIIは、東西基幹道路の南側、南方のキルギス山脈北麓までの範囲であり、Zone IIはカラ・バルタ川の西岸、Zone IIIは同河川の東岸を占める。いずれの地域も農地開拓により、南から北に傾斜する平坦な緩斜面(海拔標高700~1,100 m)が広がっている。さらに、踏査ではキルギス山脈北麓部分をZone IVとして区別し、東西に細長い北麓の傾斜面から成るZone IVaと、調査地域南西隅の、大規模な開墾が及んでいないカイナル(Kainar)川流域地帯から成るZone IVbとに細分した。基本的に、これらのZone単位で踏査を実施した。

4. 研究成果

(1) 現地踏査では計93遺跡(北半:N001~042;南半:S001~051、14件の既知遺跡を含む)を登録し、このうち59遺跡は後期青銅器時代末から近世・近代のいずれかに位置付けられ、通史

的に遺跡分布を論じることが可能となった(図1)。これにより、鉄器時代後期(前2~後5世紀)と中世後期(9~14世紀)に居住のピークがみられ、近世・近代(14~19世紀)には溪谷内の定住文化が低迷していたことを考古学的に検証した。

(2) 鉄器時代以前の多くの遺跡の存在が明らかになった。後期青銅器時代末(前1000~800年頃)に帰される遺跡は僅か1件の土器散布地(N018)であり、Zone I 東部の河岸段丘上に所在する。カラスク文化の所産と見られ、近傍に所在した集落に由来するものと思われる。鉄器時代前期(前8世紀~前3世紀)には、13件のクルガン群が認められた。墳丘径は19~70mを測り、その分布はキルギス山脈北麓(標高1,100m)から調査対象地域北限近くの沖積平野内(標高600m)まで広い範囲に及び、明確な傾向を見出すことはできない。鉄器時代後期にはクルガンに代わって円墳群9件が見られるようになる。このうち8件はZone IVbの山麓部に集中する。いずれも円礫が部分的に露出した低い墳丘を持ち、地下式の埋葬施設があるとみて間違いはない。

(3) ソグド人によるチュー渓谷への入植の始まりが6世紀(中世前期)であり、8世紀までの間に遺跡数が増加したことが分かった。6世紀にはシス・トベ(Shish-Tobe: N005)とアク=トベ・スレテンスコエ(Ak-Tobe Sretenskoe: N032)のみが定住地であり、その後7世紀にペロヴォドスコエ・クレポスト(Belovodskoe Krepost: N006)が築かれたと考えられる。これらの都市間をつなぐかたちで、8世紀までの間に多くの都市あるいは町が築かれていった。こうした継続的な植民活動は、居住地と耕作域の拡大や東西交易の活発化に加えて、8世紀初頭におけるアラブ人によるソグディアナの占領に伴うソグド人の同地への流入により、動機付けられていたと推測できる。渓谷内で大きな都市を築くにあたり、おそらくは在地の遊牧民が拠った山麓部から十分に離れており、東西あるいは南北に交易路が通るために十分に平坦で障害物がなく、加えて、居住址の周囲で十分な水を確保してコムギやブドウの栽培も行える地勢が選ばれたのであろう(cf. Vaissière 2005: 114-115)。中世前期には、遊牧民に関連する遺跡・遺構もまた、少なからず確認された。突厥の追悼遺構と看做しえる小型の矩形遺構は、いずれもシス・トベ近傍の水系沿岸に位置している。これらの遺構の多くは小河川の東岸に造営されており、モンゴル高原における類似する追悼遺構の外側東方に石列が続く一般的な特徴(林 2005: 51)に鑑みれば、この立地も偶然ではないのだろう。

(4) 中世後期に遺跡分布がピークを迎えることが判明した。9世紀から12世紀にかけて、拠点都市・町は主に東西交易路沿いに発展を遂げた。シス・トベ(N005)、ペロヴォドスコエ・クレポスト(N006)及びアク=トベ・スレテンスコエ(N032)はその範囲を大幅に拡大し、周囲に長大な城壁が廻るようになった。また、アク=トベ・チューレクスコエ(Ak-Tobe Tolekskoe: N042)が新たに建設され、同時期に北方への交易路が十分に整備されたことは明らかである。都

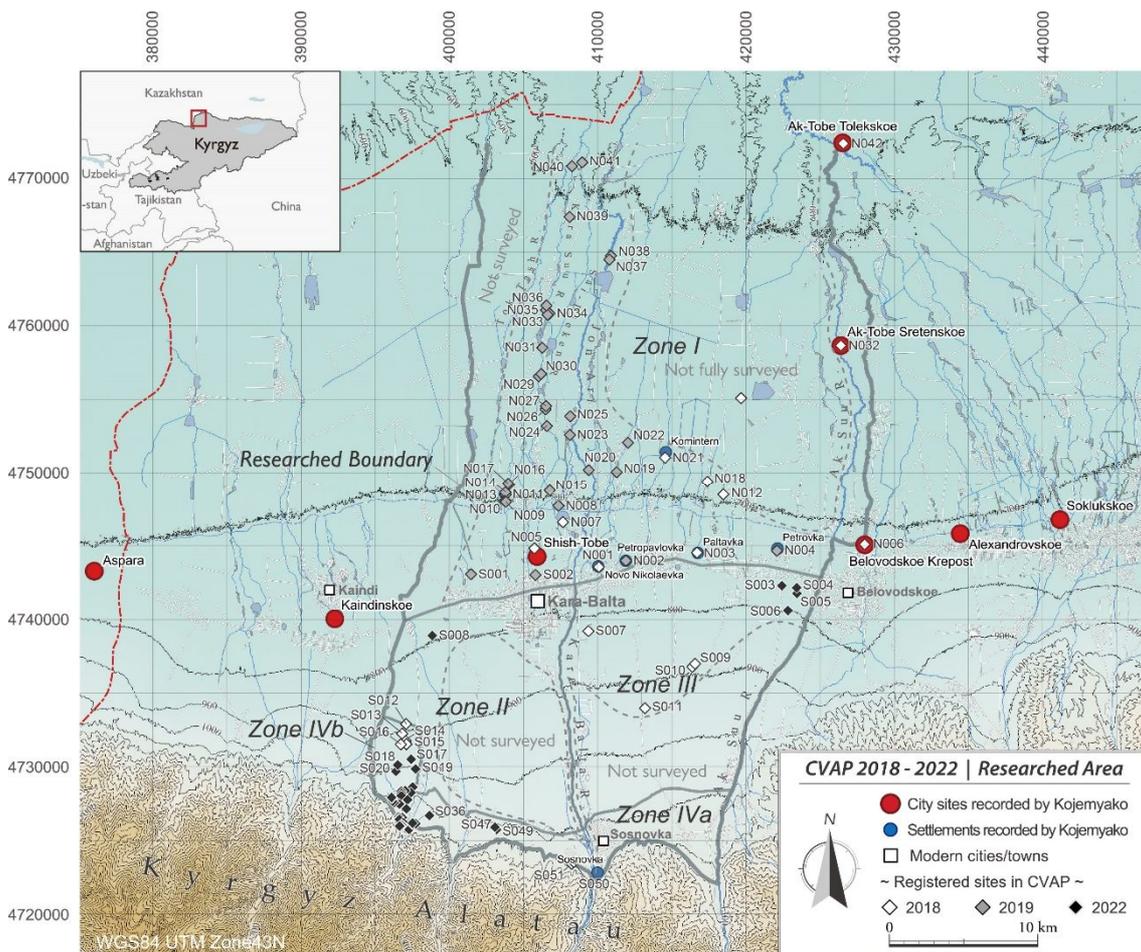


図1 全登録遺跡分布図

市・町の周辺には、要塞と望楼が一定の間隔で分布している。シス・トベの周辺を見てみると、外郭城壁の北東にN019、南東にN002、南西にS001といった要塞が配置されている。また、シス・トベ近傍にはN007とN020という望楼がある。N007は内郭城壁のすぐ北東外側に、N020は外郭城壁北東に突出する城壁沿いに位置している。これらの望楼の築造には、時期差がある可能性が高い。コジェミヤコによる調査結果に従えば、シス・トベは10世紀までには内郭壁内全体に居住地が拡大し、これ以降12世紀までに外郭壁が建造されたと考えられる（cf.



図2 N040 俯瞰写真

1959: 82-84) この段階的な拡大

状況に基づけば、N007は9~10世紀頃、N020は10~12世紀に造られたと解釈できるだろう。都市の段階的発展を示す遺跡分布状況であると言える。

(5) 中世後期の交易路沿いから外れる町として、北方の平野部に新たに造られたN040を新規に発見した(図2)。9世紀後半から10世紀後半に利用されたとみられるN040は、定住に必ずしも適しているとは言えない平野部深奥に位置しているのみならず、その範囲も多角形の城壁に囲まれており、通常の定住集落とは到底看做せない。また、城壁内の範囲には明確な建物遺構は見当たらず、僅かな起伏が見られるだけである。さらに、城壁内には遺物があまり散布しておらず、年代決定の根拠とした土器片は主に城壁外南西において採集された。こうした一連の事実を鑑みて、N040は実際の居住地というよりは交易拠点として築かれたと考えられ、その利用時期は短かった可能性が高い。推測の域を出ないが、9世紀に交易活動が活発化して拠点都市・町が拡大するに及び、8世紀に既に建設されていた北方のアク=トベ・ステップニスコエにつながる新たな交易路の活発化を視野に入れて、新規に拠点を築こうとしたのではないだろうか。しかし、その地勢や社会・経済的問題から、N040を経由する交易路はその後には発展することはなく、この代わりに、アク=トベ・スレテスコエ及びアク=トベ・チューレクスコエを経由するアク=スウ川沿いに伸びる北方ルートが10世紀以降に発達したと考えれば、これらの遺跡の分布状況を合理的に理解できる。

(6) 山麓部において、おそらく12世紀以後に造られたと考えられる集落遺跡タシュ・マザール(Tash Mazar: S026)を新たに発見した。町の周囲に城壁が存在せず、平面形も不定形である点で、これ以前の居住址とは様相を異にしている。これは、タシュ・マザールが純粋な定住農村であったことを物語っている。また、この町の南西には附属墓地(S030)が確認されており、居住が一定期間に亘っていたことがわかる。

(7) 囲い込み遺構の仮編年を構築した。時期不明の遺跡は36件、遺構数にして69基に上り、本調査研究で確認した全遺構件数(n=194)の実に35.6%を占めている。このうち囲い込み遺構(n=41)は多数を占めており、相対的な時期を推定することが可能であった。

囲い込み遺構には、5種類の平面形(楕円形 Elliptical、円形 Circular、半円形 Semicircular、矩形 Rectilinear、不定形 Irregular)がある。これらの平面形の空間分布には、明確な傾向差が見られる。囲い込み遺構は、平野部の Zone I と山麓部の Zone IV においてのみ確認されたので、平面形別にこれらの地域での分布数を比較した。すると、Zone I では専ら楕円形が卓越し、少数の矩形と円形を伴うのみであったが、Zone IV では円形が楕円形よりも数的に優位となり、全5種類の平面形が分布する状況が明らかとなった。

囲い込み遺構の相対時期を考察するにあたり、最も信頼できるのは遺構の重複関係である。Zone I に位置するN025とN034では、楕円形がその他平面形の囲い込み遺構に壊される事例が認められた。これらの重複事例に基づけば、楕円形は円形及び隅丸矩形よりも古い時期に造られたと解釈できる。また、楕円形と円形単独墓の共伴関係に着目して、後者は10世紀以前に造営された蓋然性が高いことから、楕円形囲い込み遺構も10世紀以前に位置づけられうると判断した。こうした点を踏まえて、囲い込み遺構の仮編年案をまとめた(図3)。囲い込み遺構は、半円形及び石造円形が最も古い型式と見られる。その後は、楕円形囲い込み遺構が円形単独墓と共伴関係にあり、ほぼ同時期(10世紀頃まで)に存在した蓋然性が高い。なお、楕円形囲い込み遺構は確かに平野部に多いが、山麓部にも一定数が認められることから、両地域が遊牧民の季節移動の経路上にあったことが示唆される。隅丸矩形・円形囲い込み遺構は、楕円形囲い込み遺構を壊して造られる事例(N025-1及びN034-1)に鑑み、楕円形囲い込み遺構より新しい可能性が高い。このうち隅丸矩形囲い込み遺構はN026において円形単独墓との共伴が見られたため、10世紀頃まで造営時期が遡るかもしれない。円形囲い込み遺構については、年代の定点が存在しないため判断が難しい。しかし、山麓部に集中するその特徴的な空間分布を、カラハン朝支配下の10~12世紀における平野部での都市・町の相次ぐ建設や周辺地域の開拓と結びつけるならば、遊牧

民の多くが 10～12 世紀にそれまでの季節移動パターンを大幅に変更し、山麓部に円形囲い込み遺構を新たに造営したとも考えられる。近世以降は主に矩形囲い込み遺構が造られ、規模を変えながらこの平面形が今日まで維持されていると推測する。

(8)本研究により、北方のステップ世界と南方のオアシス世界の境界に横たわるチュー渓谷における、定住社会と遊牧社会の絶え間ない関係の一端が浮かび上がった。

これまで知られてきたとおり、後期青銅器時代から鉄器時代におけるチュー渓谷西部では、遊牧を主生業とする集団が活発に往来していた。特に鉄器時代前期には、天山山脈北麓沿いの緩斜面に直径 20 m を超えるクルガンが多数築かれた。続く鉄器時代後期には、より小型の円墳が山麓部に造られるようになった。また山麓部には、この時期に属すると考えられる囲い込み遺構も見られる。北方の平野部では同時期の集落址が見つかることから、鉄器時代後期には、山麓部と平野部を南北に移動する季節移動経路が確立していた可能性がある。

6 世紀になると、西方からソグド人が入植し、平野部中央に東西に連なる諸都市を建設した。こうして始まった中世前期は、チュー渓谷における最初の都市化の時期として知られている。この時期のチュー渓谷は西突厥の支配下にあり、玄奘の記録によれば、それに従属しながらも独立した首長を頂く商業都市国家が林立していたことがわかる。チュー渓谷西部では、その初期に築かれた拠点都市シス・トベ (N005) の周辺に突厥に帰される追悼遺構が複数存在しており、これに加えて、楕円形囲い込み遺構も同時期の平野部に存在した可能性もあることから、都市定住民はトルコ系遊牧民と一定の距離を保った共生関係にあったことが推察される。

9 世紀以降の中世後期には、チュー渓谷の都市化はより一層進んだ。カラハン朝の支配下に入った 10～12 世紀にかけては、平野部の広範囲が都市域 (城壁内) に編入され、また、交易路も整備されるに及び、遊牧民の季節移動パターンが大きく変わった可能性がある。おそらくは 10 世紀以降のものと考えられる円形囲い込み遺構は山麓部に集中し、平野部ではほとんど見られないことは既に述べたとおりである。この傾向は、カラハン朝における季節移動パターンと関係があるかもしれない。カラハン朝のハーンにならい遊牧的生業を維持していたトルコ系遊牧民は、夏季には山麓部にキャンプを営んだものの、冬季には都市内に居住した故に、平野部にほとんど痕跡を残さなかったと理解することもできる。カラハン朝が中継貿易に多大な関心を振り向けていたことも勘案すると、チュー渓谷の商業都市への干渉を強めてシルクロード天山北路による東西国際交易をコントロールするために、あえて半定住化の道を選んだのかもしれない。

近世・近代には、それまで展開した定住・遊牧社会の濃密な共生関係は終焉した。イスラームの地理書によれば、13 世紀以降のチュー渓谷平野部では都市や町は放棄され、小村落のみがかるうじて存在したようである。この状況には、同時期に生じていた乾燥化も影響を及ぼしたかもしれない。

< 引用文献 >

長澤和俊 (編) 2002 『シルクロードを知る辞典』東京堂出版。
 林 俊雄 2005 『ユーラシアの石人』ユーラシア考古学選書 雄山閣。
 フォルツ, R.C. (著) / 常塚 聡 (訳) 2003 『シルクロードの宗教 古代から15世紀までの通商と文化交流』教文館。
 Vaissière, É. de la 2005 *Sogdian Traders: A History*. Handbook of Oriental Studies, Section 8, Uralic and Central Asian Studies, Vol. 10. Leiden and Boston: Brill.
 1950

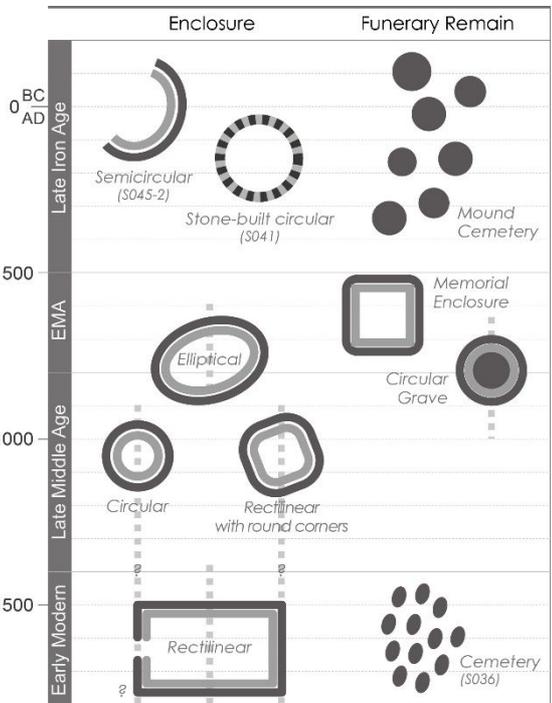


図 3 囲い込み遺構の編年試案

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 8件／うちオープンアクセス 9件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 山藤正敏・齊藤茂雄・山内和也・バキット アマンバエヴァ | 4. 巻 2024 |
| 2. 論文標題 天山山脈北麓に古代遊牧活動を探る キルギス共和国ケゲティ渓谷の考古学調査（2023年） | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 第31回西アジア発掘調査報告会報告集 令和5年度考古学が語る古代オリエント | 6. 最初と最後の頁 107-111 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 該当する |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 山藤正敏 | 4. 巻 21 |
| 2. 論文標題 アク・ベシム遺跡第2シャフリスタン地区出土土器の年代学的検討 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 帝京大学文化財研究所研究報告 | 6. 最初と最後の頁 1-23 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 山藤正敏・大谷育恵・齊藤茂雄・山内和也・バキット アマンバエヴァ | 4. 巻 2023 |
| 2. 論文標題 天山山脈北麓に古代遊牧活動を探る キルギス共和国ケゲティ渓谷の考古学調査（2022年） | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 第30回西アジア発掘調査報告会報告集 令和4年度考古学が語る古代オリエント | 6. 最初と最後の頁 85-89 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 該当する |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 山藤正敏・バキット アマンバエヴァ | 4. 巻 2023 |
| 2. 論文標題 シルクロード天山北路の形成過程 キルギス共和国、チュー渓谷西部の考古学踏査（2022年） | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 第30回西アジア発掘調査報告会報告集 令和4年度考古学が語る古代オリエント | 6. 最初と最後の頁 90-93 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 該当する |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 山藤正敏・バキット アマンバエワ | 4. 巻 2021 |
| 2. 論文標題 シルクロード都市の新発見 キルギス共和国チュー渓谷西部における考古学踏査 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 奈良文化財研究所紀要 | 6. 最初と最後の頁 30-31 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 該当する |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 山藤正敏・バキット アマンバエヴァ | 4. 巻 2021 |
| 2. 論文標題 シルクロード天山北路の形成と展開 キルギス共和国、チュー渓谷西部の考古学踏査 (2018・2019年) | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 第28回西アジア発掘調査報告会報告集 令和2年度考古学が語る古代オリエント | 6. 最初と最後の頁 72-75 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 該当する |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 城倉正祥・田畑幸嗣・山藤正敏・高橋 亘・山内和也・バキット アマンバエヴァ | 4. 巻 8 |
| 2. 論文標題 キルギス共和国アク・ベシム遺跡の測量・GPR調査 ラバト地区を中心に | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Waseda Rilias Journal | 6. 最初と最後の頁 269-291 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 該当する |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 山藤正敏・バキット アマンバエヴァ | 4. 巻 2020 |
| 2. 論文標題 シルクロード天山北路の形成過程 キルギス共和国、チュー渓谷西部の考古学踏査 (2018・2019年) | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 第27回西アジア発掘調査報告会報告集 令和元年度考古学が語る古代オリエント | 6. 最初と最後の頁 67-70 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 該当する |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 城倉正祥・山藤正敏・ナワビ矢麻・伝田郁夫・山内和也・バキット アマンバエヴァ | 4. 巻 6 |
| 2. 論文標題 キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘（2015年秋期）調査出土遺物の研究－土器・瓦編－ | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Waseda Rilias Journal | 6. 最初と最後の頁 205-257 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 該当する |

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 山藤正敏・齊藤茂雄・山内和也・バキット アマンバエヴァ |
| 2. 発表標題 天山山脈北麓に古代遊牧活動を探る キルギス共和国ケゲティ渓谷の考古学調査（2023年） |
| 3. 学会等名 第31回西アジア発掘調査報告会 令和5年度考古学が語る古代オリエント |
| 4. 発表年 2024年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 山藤正敏・大谷育恵・齊藤茂雄・山内和也・バキット アマンバエヴァ |
| 2. 発表標題 天山山脈北麓に古代遊牧活動を探る キルギス共和国ケゲティ渓谷の考古学調査（2022年） |
| 3. 学会等名 第30回西アジア発掘調査報告会 令和4年度考古学が語る古代オリエント |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 山藤正敏・バキット アマンバエヴァ |
| 2. 発表標題 シルクロード天山北路の形成過程 キルギス共和国、チュー渓谷西部の考古学踏査（2022年） |
| 3. 学会等名 第30回西アジア発掘調査報告会 令和4年度考古学が語る古代オリエント |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Yamafuji, M., Amanbaeva, B., Bazilov, D. |
| 2. 発表標題 Formation of the Tien Shan North Road, the Silk Road: A Preliminary Report on the First and Second Survey Seasons of the Chuy Valley Archaeological Project (CVAP), Northern Kyrgyz |
| 3. 学会等名 12th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 山藤正敏 |
| 2. 発表標題 碎葉鎮とアク・ベシム遺跡 ラバト地区の考古学踏査 (2015～2018年) |
| 3. 学会等名 中央大学人文科学研究所公開研究会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 山藤正敏・バキット アマンバエヴァ |
| 2. 発表標題 シルクロード天山北路の形成と展開 キルギス共和国、チュー渓谷西部の考古学踏査 (2018・2019年) |
| 3. 学会等名 第28回西アジア発掘調査報告会 令和2年度考古学が語る古代オリエント |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 山藤正敏 |
| 2. 発表標題 キルギス共和国、チュー渓谷西部の考古学踏査 (2018・2019年) |
| 3. 学会等名 2019年度シルクロード学研究会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Yamafuji, M., Jokura, M., Yamauchi, K. and Amanbaeva, B. |
| 2. 発表標題 A Chronological Consideration on the Rabat of Ak-Beshim/Suyab, a City on the Silkroad: A Preliminary Result of an Analysis on Pottery from the 2015 Seasons. |
| 3. 学会等名 The Eighth Worldwide Conference of the Society for East Asian Archaeology (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 山藤正敏 |
| 2. 発表標題 シルクロード天山北路における東西文化接触ーキルギス共和国アク・ベシム遺跡の調査成果からー |
| 3. 学会等名 第123回公開講演会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 山藤正敏 |
| 2. 発表標題 シルクロード天山北路の考古学ーキルギス共和国チュー渓谷における調査成果ー |
| 3. 学会等名 前近代ユーラシアにおけるフロンティアとトランス・フロンティア研究班研究会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 山藤正敏 | 4. 発行年 2024年 |
| 2. 出版社 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 | 5. 総ページ数 124 |
| 3. 書名 天山山脈北麓における定住 - 遊牧社会関係史の再構築 キルギス共和国北部、チュー渓谷西部における考古学踏査 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | | | |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | |
|---------|---------------------------------|--|--|
| キルギス | キルギス共和国国立科学アカデ ミ－歴史考古学民族学研究所 | | |